

銃声が響いたので、その方向に飛んで行くと、溶接作業の仲間が一人胸部から血を吹き出して倒れていた。理由はわからないが歩哨と何かのトラブルがあったことに間違いない。死体は間もなくソ連人労働者によって所外に運び出され、トラクタの走音で消え去った。無情の悲愴が背すじを走った。

約一年間を第二収容所で過ごした私は、四人の仲間とともに移動することとなった。

行き先は港湾北部に繋留された一万トンくらいの貨物船収容所で、船名は「サマルカンド」と間もなくわかった。作業は電気関係の管轄作業で、船内には「沿海地方指導講習会場」のアーチが甲板に掲げてあり、毎日多くの各収容所からの仲間たちがアクチーブ教育のため出入していた。長兄定信と同級生であった同郷の猪俣氏と会ったのもこの甲板上であった。

波打ち返すかなたは家族の待つふるさと、夕陽沈む水平線を見つめながら尽きぬふるさとの話に時を忘れて語り合った。

隣の船は同じトン数の「サラトフ」号で、「沿海地

方楽劇団」の看板があり、歌、踊り、演劇の練習が行われていた。

だまされ続けた四年余月の印象は消えることはない。

望郷の果てに

新潟県 村岡 千代貴

北朝鮮の定平で終戦、武装解除となる。我が部隊は約二か月後、十月十三日、東京タモイという言葉にだまされ興南港から望郷の念一つで乗船した。十七日、ソ連ウラジオ港に入港している。見事に裏切られた。

翌朝、上陸、岸壁に沿って待ち受ける貨車へ、五十人一区切りに缶詰め状態のまま北に向けて進行だと耳にした。食事もほとんど配給のない囚人並みの取り扱いはガックリした。十月二十日夕暮れ、ある土地に下車。話ではイマンという地名だった。当分この地でのラーゲル生活になることを自覚、部隊は応召や現役兵

との混成。年代は二十歳から四十歳くらい。出身地は北海道から九州までとの文字どおり混成だった。ラーゲルはシベリア牢獄跡地だという。ラーゲルは住める形ではなかった。南京虫やシラミの巣窟。一室に二十数人の雑居二段造りベット。

製材工場に作業することになったのは十一月七日の革命記念日後と記憶している。直径抱きつかれぬほどの巨木の製材に驚いた。動力は廃材を燃料としてたかれていたので、馬力は弱い。電圧は高低の流れから能率定まらず、作業内容は乏しく、考えられないやり口には一段と驚くばかりである。

以前北支の済南陸軍病院で三か月ほど衛生兵教育を受けたことから、五百住軍医大尉の指示によって先輩三人と医務室勤務をすることになった。このころから翌二十一年の雪解けころまで抑留者には最も過酷と苦難との闘いの時期であった。夜明けは八時ごろ、日没は四時前、作業現場では一にも二にもグバイグバイの連発である。全員飢えと酷寒との闘い。疲労は増し病人の続出から、入室の空きなく看護にも限界に迫られ

る始末。薬品不足、その上医療器具は語るに及ばぬ状態。どうして病人の回復などあろう。五百人編成で五十人余の患者。その病名は、栄養失調、肺炎、肺結核、下痢、腸チフス、その上日々の重労働、指導性のない作業限界からなる負傷者、病人は清潔なき雑魚寝、高熱に打たれあえぐ悲鳴、うわ言が耳の奥深く残り、疲れを取ろうと横になるが眠れない始末。手の施しようもなく、ただ「頑張れよ、ここで死んでどうする」、「故郷の親、妻子親族が他国におる君の帰りを神仏に願って待っている」と励ます以外彼らに力づける手段はなかった。反面、伝染病など万一分に感染したらと考えると、なんとなく背すじがぞくぞくする毎日が続いたことは、今なお心に深く刻まれている。

看護にあたっては二十四時間マスクを肌身離さず常にクレゾール液消毒は習慣づけ、自身のみの予防ではなく、患者全員に対する安全対策でもあった。看護の多忙から身の物、白衣の洗濯もできず腕まくりの状態で患者への必死全力投球、不眠不休の看護の手も彼らに通用せず、息を引きとる無念の涙の別れ。ある朝、

三人一度に冷たく仲間から離別の人々と変わっていた。冷えた遺体から無数の白い黒々としたシラミがひも状となり、まだ生暖かい患者の体へと移動する。その悲惨さの余り流れる涙も乾くありさまでした。ソ連軍医の話では、君たちにはこの大勢の患者を扱う任務がある。第一に食べることが大事だ、ウンと体力をつけるのだ。五百人分の糧秣から十分取って食べろ、と押しつける。何とばかな言い分なのか。国は民主主義、人間が人間同士の搾取は禁ずる、すべて平等を条件にする国の指導者格将校の平気な態度には、ただ茫然とする。

厳しい冬が去り、暖かい五月が我々を迎えてくれた、いつとなく酷暑も去り、あのときの患者との生死をもにしたころの季節とは、天と地の違いである。ああシベリアの春なのだ、気分も晴れやか、日も徐々に長くなっていく。二、三人と寄るたび、故郷の食べ物、品々を口に並べるくせになっているのが常だった。ほたもち、ようかん、西瓜や果物、特に銀飯を満腹したいなあと、何かと食べることだけが話題だった。年月

の流れるにつれて作業にもなれた、片言混じりの露語もわかるようになってきた。そのころの駄作

病める友桜を語り今日も暮れる

この句は未だに忘れぬ思い出として脳裏から離れない。毎日繰り返す生活が続く。そんなとき部隊に突然移動命令が出る。いやだった約半数の大移動だった。作業になれたかと思う最中、幾回繰り返されるたびに、同朋と涙の別れとなり、まるで兄弟同士の引き裂かれる思いの寂しさであったのです。そんなことから地形的にもなれぬことから心身ともに疲労度が増すばかりか、態度にも異状が生ずるのです。二十二年の春ころ、ソ連女性軍医の命令で医務室勤務より炊事勤務へと転ぜられた。作業内容が一変したものの、心配した割に肉体的には苦痛は感じなかった。そのころから民主運動教育が前進してきた。中核なる共産主義教育はますます盛んになって日本人同士の団結も、精神的な苦痛の闘いとなり、目につくほど煩悶を生じ始めてきたのであります。

イマンには二十三年の八月まで三か年近くの抑留生

活となった、自分にはただただ長かった思いが残る。その間、ソ連秘密警察「ゲーバウー」のうるさい監視の目が光る。以前所属部隊が北支派遣との理由から、ほとんどの人がいやな経験をした。自分も取り調べ尋問等が二回あった、まことに恐ろしい国だと強く心に刻まれたことです。特に驚いたことは、教育が広範囲に広がったころ、日本人同士相互警戒心、猜疑心が高まるばかりであった。そんなある日、先の大移動からやや忘れようとした矢先でもあるのに、季節は八月を指していた。移動命令は急転直下のごとく、まるで追いついてる同様、手ぶら姿で貨車に押し詰められての輸送ぶりであった。口説きながら貨車にゆられ、目的も暗然、あせる一方、下車させられたところは炭坑地アルチョムと連絡あり。環境になれたイマンの地から、再び暗い生活との活動が待っている。人生初めて見聞の坑夫作業に全く自信なく心配が先走る。作業開始だ。翌朝古びた保安帽につけられた薄暗いライトが何よりの作業上に頼りの道具でもある。坑内はわき水に驚くと思うと、落盤の残骸が足元を泣かせる。照明も乏し

く危険状態のままだった。このような個所の動作は話のほか。作業監督はところかまわず怒鳴るの繰り返しだ。全く生きた心地もない、ただ気のあせりが疲労を積み重ねる弱気だった。数日後坑外作業に移される、雑役のようだ。だが、落ち着く間もなく変更の指示が、今その地名は思いつかないが、随分奥地に向かった、作業は道路開発隊と判明。十月というのに住む宿舍の設備もなく、ソ連側はここで越冬すると語る。馬鹿げたやり口には一斉に力が抜ける現実である。早速越冬の幕舎設営に取りかかる。十月の夜は寒さ厳しく、翌朝には未だ体験していない十センチ以上もある霜柱を踏み驚いた。いやな雪空だ。みぞれや小雪との闘いの中に民主運動指導者のもと「赤旗の歌」やソ連国がつくった「革命歌」を往復歌い続けたのである。不思議にも応召以来離れることのなかった人、その人はふるさとの隣村出身、星利一君だった。二人でまたシベリアのこの地で四度目の冬を越すのかといやな話を交わす中、ふるさとの四季のよさをもらしつつ相互に励まし合う日々だった。

十月三十日、いつも変わらず作業に向かった夕空、粉雪身に触れている日没、作業終了、宿舎に着く。その夜、ソ連作業隊長より東京ダモイの命令が出されるも、一時の喜びではないか、全員ではなく約半数だという。その人名はどうなのか、その中には自分の名はあったが残念にして星君の名はなかった。余りの情けなさから星君に対する呼びかける声もつまり、顔向けもつらかったが、過去三回のダモイも皆だまされただけにだれも信用する者はいなかった。

帰国することは日々の願いである。本当かどうか運は天に任せ、指示の貨車に乗車する。星君とともに健康だけとは目と目の交わす姿で別離した悲惨さ、まことにすまない気持ちが続いたのです。帰国だ、その気持ちの喜びのかたわらふと座席を見れば、情けないこと、貨車は伐木運搬車ではないか、休む体は痛みが増す。

数日後待ちに待った終着駅ナホトカに下車する。全員指定されたラーゲルへ係員の案内で入舎する。ナホトカには祖国帰還者のためのおのおのの役目をするグル

ープが労働についていた。中には民主運動指導者は旧軍隊精神の排除、入ソ以来今日に至るまでの自己反省会など、個人的には修行作法と言語解釈になるうか、あくまでも民主的な人間に身を清めさせる係のようである。数日滞在中の行事ともなつて、乗船するまで毎日の日課であった。素行に乱れがあれば、即大衆の前でつるし上げにかけられる、つまり自己批判から深く反省する。以上の形態などは、今祖国を眼前にして、まことに気の毒な光景にさらされた幾組の目にとまるたび、敗戦の悲哀を深く感じさせられた。

十一月十七日、待望の乗船の日がいついにくる。これこそ長く待ちわびたまことのダモイ東京、彼らの口ぐせの言葉なのだ。今は夢ではない。どう表現してよいのだろう。余りの感動で胸は裂ける寸前だった。目の前に横たわる栄豊丸が祖国日本へと橋をかけてくれるため、今ソ連の港ナホトカで手を伸ばしている。乗船だ、全員万歳万歳の声が怒濤のごとくナホトカの空高く広まる。全員甲板上に血色淡い顔に微笑を浮かべ、万歳の連呼を栄豊丸に満載してナホトカ港を出帆する

喜びであった。時十一月十七日、船は一路祖国日本舞鶴港へと進む。

広大な日本海水平線を遙かに望む甲板上を強く踏みしめ、生還の無事をどことなく手を合わす。十一月二十日、長かった望郷三年三か月、いよいよ祖国がかすかに見え始めた。懐かしい日本だ、鳥が見えるという声が響くのだった。

栄豊丸は山合いをくねるように舞鶴湾へ引き寄せられて行く。兩岸山々に秋深く秋独特の色彩に染められている。まさに日本国だけに見られる景色であろう。シベリアでは四季の区別はなく、夏冬だけを動物が知るのみである。景色といってもぱっとしなかつたようだ。

さあ、上陸だ。歓喜と安堵と万感こもごもの中に、自分だけがこれだよいかと急転する。

それはイマンの地で、日夜生死ともに交わった朋友や犠牲者に対してご冥福を祈らずにはおられなかつた……合掌する。

なお、残留となった星君に対してはすまぬ毎日だっ

たが、幸いに星君は二十四年の暮れに無事帰還された。ふるさとでの再会、幾度となく感激の握手、相互喜び合った。

シベリア抑留労苦調査

京都府 久保田 清 蔵

昭和二十五年四月召集令書受ける。京都師団歩兵九連隊へ入隊。(甲種合格第二国民兵役で初年兵三十七歳で入隊)。四月二十日京都より移動(北朝鮮平壤歩兵二四二部隊編入) 毎日猛訓練が続く。

ソ連軍参戦満州へ襲来。二十年八月十五日終戦。鮮内召集兵は即時解除。帰宅す。隊長命令により兵隊は早く帰国できるから、自由行動をとるなと禁じられる。八月十八日まで鉄道は一日数本南朝鮮へ運行していた。自分たちも脱走して汽車に乗れば早く帰国できた。当時はそんなことは考えられなかつた。八月二十日中に三合里(平壤部隊の演習場)に集合命令。軍服衣類